

誰もが知りたい

ローザンヌ宣教シリーズ

No.60

ユダヤ人伝道

— 教会への召命 —



A New VISION
A New HEART
A Renewed CALL

Lausanne
Occasional
Papers

No.60

JEWISH EVANGELISM
— A CALL TO THE CHURCH —

関西ミッション・リサーチ・センター

ユダヤ人伝道 ―教会への召命―

JEWISH EVANGELISM: A CALL TO THE CHURCH

ローザンヌ世界伝道フォーラム特別報告 No.60

[Lausanne Occasional Papers] No.60

新しいビジョン、新しい心、新しくされた召命

主催:世界伝道委員会

作成:世界伝道フォーラム・第31分科会

場所:タイ国パタヤ

開催:2004年9月29日～10月5日

2004年世界伝道フォーラム・特別報告No.30-60エディター:

デイビッド・クレイドン

著作権:© 2005

ローザンヌ・世界伝道委員会(LCWE)と各国の国内委員会

info@lausanne.org www.lausanne.org

(LCWEは必ずしもこの報告書に表わされた見解の全てに

賛同するわけではないことを申し添える)

ローザンヌ・世界伝道委員会

(LCWE・Lausanne Committee for World Evangelism)

日本語版出版:関西ミッション・リサーチ・センター

まえがき

関西ミッシヨンリサーチセンターが一九八〇年に発足してから、一つの大きな働きはローヌザン宣教シリーズの出版であつた。「福音と文化―ウィローバンク・レポート 第二号」「難民への伝道 第五号」「中国人への伝道 第六号」「伝道と世俗化 第八号」「伝道と新宗教 第二十一号」「イスラム教徒への伝道 第三十三号」「伝道と仏教徒 第一五号」「シンブル・ライフ・スタイルへのすすめ 第二十二号」「伝道と社会的責任―グランド・ラピッツ・レポート 第二十二号」の出版に続き、日本宣教を分析した三冊の本、「名目上のクリスチャン 第二十三号」「続・名目上のクリスチャン 第二十三号」「日本人による海外宣教の歩み」、また、「ローザンヌからマニラまで―マニラ宣言全文訳およびその解説付」を出版できた。一番大きな働きはボツシユの「宣教のパラダイム転換」上巻、下巻の監修と出版の協力である。

今回、二〇〇四年九月二十九日から十月五日までにタイのパタヤで開かれたローザンヌ研究シンポジウムにおいてなされた分科会の中で、とりあえず「ユダヤ人伝道 第三十一号」を出版することになったが、続けてこのシリーズを翻訳出版できることを願っている。（英訳原文については、インターネット <http://www.lausanne.org/Brix?pageID=127722> いつでも見ることができる）。

この翻訳の労をとってくださった近藤宏子さんに感謝したい。また監修は神戸ミッシヨンリサーチセンター主事・有木義岳、理事・鍋谷堯爾師が行い、神戸ルーテル聖書学院・飛鷹美奈子さんの協力

によって出版にこぎつけることができた。ユダヤ人伝道の現状を知るとは、日本のキリスト教会の活性化につながり、小さな日本のクリスチャンの群れも、神の国の世界的な規模の中で役割が与えられていることに目覚め、新しい賜物が起こされるように祈っている。

関西ミッシヨン・リサーチ・センター

理事長 子安敏夫
主事 有木義岳

ユダヤ人の歴史

【紀元前】

一六七 アンティオカスIVの迫害。

一六四 ユダ・マッカバイオスの蜂起開始。

【紀元】

三〇 ペンテコステの日、キリスト教会の誕生。

四九 エルサレム会議、ユダヤ人信仰者に対して異邦人クリスチャンの立場が認められる。

七〇 エルサレムの陥落、ユダヤ人信仰者とユダヤ教徒の決定的な分離。

一三二―五 バル・コクバの反乱。

三二三 コンスタンチヌスによるキリスト教の公認。

三二五 ニケア会議において、キリスト教の反ユダヤ的な立場が確立する。

三九二 キリスト教は国家宗教となり、日曜日以外に休日を守るとは禁止された。

六三四―一〇九九 アラブおよび、セルジユク・トルコのパレスチナ支配。

一〇九九―一二九一 十字軍の侵攻とパレスチナ支配。

一〇九六―九九 第一次十字軍のユダヤ人虐殺（ライン川流域）。

一二九〇 ユダヤ人のイギリスからの追放。

一二九一―一五六一 エジプト、マムルーク朝のパレスチナ支配

- 一三二二 ユダヤ人のフランスからの追放。
- 一三四八―五〇 ペスト流行に伴うユダヤ人虐殺。
- 一四八〇 スペインの異端尋問始まる。
- 一四九二 ユダヤ人のスペインからの追放。
- 一五一六―一九一七 オスマン・トルコ帝国のパレスチナ支配。
- 一六二四 イタリアのゲットー設置。
- 一六四八―四九 ポーランド、ウクライナにおいてユダヤ人虐殺。
- 一七四五 ユダヤ人のプラーハ追放。
- 一七八八 ポーランド、ハイダマツクにおけるユダヤ人虐殺。
- 一七九〇―九二 モロッコにおけるユダヤ人虐殺。
- 一七九一 ロシア、ユダヤ人居留地を設定。フランス、ユダヤ人に平等の権利を認める。
- 一八一九 ドイツを中心に反ユダヤ騒動広まる。
- 一八八一―八四 ロシアのポグロム。
- 一八八二 ユダヤ人のロシアからのパレスチナ移住。
- 一八八五 ドイツ、ポーランド系ユダヤ人を追放。
- 一八九四 ドレフュス事件。ヘルツェルのシオニズム運動。
- 一八九七 第一回シオニスト会議（バーゼル）。
- 一九〇四 ヘルツェルはピウス六世に面会を求めたが、法王は、「ユダヤ人は主を認めていないから、わたしもユダヤ人を認めない」といつて面会を拒否。

一九〇五—六 ウクライナ、ベッサラビア、ビアウイストクでポグロム。

一九〇五 第二回、ロシアからのユダヤ人、パレスチナ移住。

一九〇九 テル・アビブ建設。

一九一四—一八 第一次世界大戦。フセイン・マクマホン書簡により、中東にアラブ国家の建設を約束する。

一九一六 サイクス・ピコ協定により、イギリスとフランスは中東を分割統治することとする。

一九一七 バルフォア宣言により、イギリスは、ユダヤ国家の建設を支持する。

一九一七 イギリス軍エルサレムを占領、トルコのパレスチナ支配終わる。

一九二七—二二 ロシア、ポーランドのポグロム、ロシアのユダヤ難民、日本流入。

一九二〇—二二 アラブの反ユダヤ暴動。

一九二五 ヘブライ大学開校。

一九三五 ニュールンベルグ人種法、ドイツ会議で承認される。

一九三九 ドイツのポーランド占領、ホロコーストのはじまり。

一九四〇 ナチス占領下のポーランドからリトアニアに逃亡してきたユダヤ人に杉原、千畝領事、通過ヴィザ発給。六千人、日本へ流入。

一九三九—四五 第二次世界大戦、パレスチナのユダヤ人、連合国側に立つて、ドイツと戦う。

一九四二 ユダヤ人問題の最終解決をワנゼー会議で討議。ユダヤ人の抹殺計画承認。

一九四五 イギリス政府はユダヤ人生き残りのパレスチナ移住を阻止。

一九四六 ポーランドでポグロム発生。

一九四七 イギリス政府は、パレスチナ問題を国連へ付託。国連は、十一月、パレスチナ分割を決

議。

一九四八・五・一四 イギリスの委任統治終了。イスラエル独立宣言。

一九四九 イスラエル、アラブ四カ国と休戦協定。一九五〇—五六年、反イスラエル、テロ激化、

パレスチナのアラブ難民とアラブ世界からのユダヤ人難民発生。

一九五二 日本、イスラエルと国交樹立。

一九六七 六日戦争。

一九六七 ポーランドでポグロム発生。

一九七二 日本赤軍によるロッド空港乱射事件（五月）。ミュンヘン・オリンピック村襲撃事件（九月）。

一九七三 アラブによる石油戦略により、石油ショック。

一九七四—八二 イスラエルとエジプトの長い交渉の末、イスラエル、エジプトにシナイ返還。

一九八〇—八八 イラン・イラク戦争。

一九八七 ガザ西岸でインティファダ発生。過激イスラム原理主義者ハマス、ヒズボラ、反イスラエル・テロを激化。

一九八九・四 ウイローバンク宣言。

一九八九 ソ連邦の崩壊と混乱。そしてユダヤ人のロシアからの大量移住始まる。

一九九〇 湾岸戦争。

一九九三 イスラエルとPLOの相互承認。パレスチナ暫定自治原則に調印。

一九九八・三 ヨハネ・パウロ二世、「わたしたちは記憶にとどめます——シヨアーを反省して——」
発表。

二〇〇四・一一 アラファト議長、死亡。

二〇〇五 幅八メートル、長さ五〇〇キロの分離の壁ができる。

二〇〇六・一 ハマス、選挙に勝利。

ローザンヌ・特別報告作成の基本的考え

ローザンヌ運動は「全世界に全き福音を伝える全き教会」をめざして奉仕する国際的運動です。

エジンバラ（一九一〇年）とベルリン（一九六六年）で行なわれた歴史的会議を母胎として、ローザンヌ運動は、伝道者ビリー・グラハムの呼びかけで、一九七四年七月スイスのローザンヌで開催された第一回世界伝道国際会議から、誕生しました。この会議の画期的成果は、一五〇ヶ国から参加した二四三〇人の出席者によって支持されたローザンヌ誓約です。この誓約は、信条の中に歴史的に宣言されたキリスト教信仰の本質を明らかにしたものであり、私達の信仰に、宣教の明らかな新次元を加えるものです。多くの活動が、このローザンヌ会議から、また一九八九年マニラで開かれた第二回会議から、生まれました。多くの言語で書かれたこのローザンヌ誓約と多くの地域活動及びローザンヌの名の下に行なわれた特別会議についての詳細は、www.lausanne.org で読むことができます。

ローザンヌ国際委員会は、世界中からクリスチャンの指導者を集める会議を再び開くように、聖霊が導かれていることを確信しました。今回ローザンヌ国際委員会は、若い指導者達を参加させることを計画しました。また、今日急速に教会が成長している地域で活躍している人々が会議に出席できるように資金調達に努力しました。この会議をフォーラムと呼ぶことが決定されました。フォーラムには、計三一の分科会で討議される議題のどれかひとつに意見を発表できる人であれば参加が許されました。分科会の議題は、世界に福音を伝えるという私たちの任務の中で、今日何が重要な議題であるかを知らるための調査がなされ、決定されました。この特別報告はこれらの分科会のひとつから生まれ

た報告です。各特別報告書は各分科会で作成され、www.lausanne.org で読むことができます。

二〇〇四年に開催された世界伝道フォーラムのテーマは「新しいビジョン、新しい教会、新しくされた召命」でした。このフォーラムは二〇〇四年九月二十九日～十月五日、タイ国のパタヤで開かれました。一三〇ヶ国から集まった一五三〇人の出席者は、三一の分科会のどれかひとつに参加しました。フォーラムの結びとして採択された宣誓文は次のように述べています。

真剣な討議と祈りの中に、共に労するスピリットがありました。世界の諸地域からさまざまな文化をもった代表者達が一堂に会し、お互いから学び合い、世界宣教のために、聖霊に新しい導きを求めました。参加者達は聖霊の導きの下に、共に行動したのです。

近年、世界の政治、経済における劇的变化は、教会の宣教のあり方にも大きな変化をもたらしました。東と西の両極化は、教会が現在の変化に適切に対応するにはどうすればよいか、について神の導きを求めることを最優先課題としています。

三一の分科会においてこれらの新しい現実、すなわちテロリズム、メディアの社会的役割、貧困、クリスチャンへの迫害、家庭崩壊、政治的、宗教的ナショナリズム、ポストモダン思想、幼児虐待、都市化、障害者の軽視などが考慮に入れられました。

これらの分科会が世界宣教の重要な方策を求めて取り組んだ時、大きな前進がありました。これらの分科会が明確な指針を提示することに力を注いだ時、さらに大きな伝道戦略が明らかにまりました。

分科会において、第一に、教会の主要な努力は、福音を知るチャンスの無い人々に向けられ

るべきだということが確認されました。福音がまだ伝えられていない六千のグループの中に、自立教会が確立されるように援助に力を注ぐことが中心課題です。

第二に、主の御言葉は、隣人を私達自身のように愛するように命じています。この御言葉の実践において私達は足りない者です。私達は、障害を持つ人々、周辺に追いやられた人々、あるいは私達とは異なるライフスタイルや霊的見解を持つ人々に、愛と憐れみを持って、仕えていく決意を新たにしなければなりません。また世界人口の多数を占める子どもや若い人々に福音を伝えていくために献身する必要があります。なぜなら、彼等の中には、虐待を受けたり、奴隷にさせられたり、軍隊に強制的に入れられたり、児童労働に従事させられたりする人々が多いのです。

第三に、教会の成長は今や西側世界の外側で加速していることを認識して、戦略を立てるべきです。アフリカ、アジア、ラテンアメリカからの参加者を通して、私達は「南」の教会のダイナミックな性質と急速な成長を知っています。「南」から来た参加者達はますますリーダーシップを発揮していくことでしょう。

第四に、世界には、知識がストーリーという形式を通して伝達される方が、良く理解できる人々が多くいます。世界人口のかかなりの部分は、書き言葉によるコミュニケーションを通してしか知識を吸収することができない人々、あるいははしたくない人々から成り立っています。それゆえに、そういう人々にはストーリーという形式や譬え話を用いて福音を伝えていく必要があります。

第五に、私達は教会がメディアを用いて未信者を霊的真理へと導く方法に彼等の文化を採り

入れたり、また彼等の文化的背景にふさわしい方法でイエス・キリストを宣べ伝えるように求めます。

最後に、私達はすべての信者達が祭司であることを確認したいと思います。そして教会は、女性を、男性を、若い人々を訓練し、励まし、力づけて、世界に伝道する場において、証人として、同労者として自分達に与えられた召命を全うするように、と求めます。「変革」はワークグループから生まれたテーマでした。私達は、私達自身が常に変革されなければならないことを認めます。私達を聖霊の導きと神の御言葉に委ね続けて、社会的、経済的変革に対応できる方法で、キリストにあるクリスチャンの仲間達と共に成長しなければならないことを認めます。私達は、福音の広がり と 神の御国の建設が、身体と心と精神と霊に関連があることを認めます。それゆえに私達は、私達の奉仕が社会と福音宣教とに完全に結びつくようにと求めます。

私達は、世界中で信仰のゆえに迫害されている人々のために、命の危険にいつもさらされている人々のために祈ります。私達は患難の中にある兄弟姉妹を支えます。私達は、迫害されている教会の抱える現実が、キリストの全きからだにとつて、ますます祈りの課題となっていることを知っています。同時に、私達はどこにあつても、良心の自由という権利を守るために戦う時であつても、私達の敵を愛し、善を行うことの重要性を知っています。

私達はHIVエイズの蔓延に深く心を痛めています。これは歴史上、人類にとつて最大の緊急課題です。ローザンヌ運動はこの病気に對して全教会が祈り、応答するように求めます。

九月一日の同時多発テロ、イラク戦争、テロとその報復合戦は、福音やキリスト教信仰が如何なる国や地域をも擁護するためのものとなつてはならないと、私達にはつきりと示してい

ます。キリスト教信仰は政治形態を越えるものであると私達は確信します。私達は戦闘によつてもたらされる死と破壊に心を留め、嘆き悲しみます。クリスチャンが平和のために祈り、和解の働きに積極的に加わり、紛争を宗教戦争に変えるような全ての企てを避けるように求めます。このような状況において、クリスチャンの務めは平和を作り出す者になることです。

私達は平和と和解のために祈ります。また私達の宣教活動を通して、平和をもたらす方法に神の導きがあるように祈ります。私達は福音を宣べ伝える機会の扉が開かれるように、神が国々の事情にご介入下さるようにと、祈ります。私達は、教会がすべての信者達に働きかけ、地域社会そして世界宣教のために集中して、たえず祈るように、励ましを与えるようにと祈ります。このフォーラムにおいて、男性、女性が共に手を携えて活動し、良きパートナーシップを示してくれました。ちょうどそのように、世界中の教会が、男性も女性も共に手を携えて、良きパートナーシップを発揮し、与えられた賜物を最大限に用いて、世界宣教のために労するようにと、求めます。

私達はまた、将来の指導者を育成することにもっと努力する必要があることを認識しています。私達は、将来生き生きと奉仕する指導者達を生み出すにはどうすれば良いかを、教会が真剣かつ創造的に考えるようにと、求めます。

このことについて、地域教会から多くの事例が提出されています。これらの提案についてはローザンヌ・ウェブサイトで、またローザンヌ特別報告で知ることができます。これらのケーススタディと行動計画を神が用いてくださるように、神の教会がさまざまな方法を用いて、明確かつ適切なメッセージを発し、そのメッセージがこれまで顧みられなかった人々や地下抵抗

運動者達に届き、そうして、すべての人が福音を聞く機会を与えられ、福音に応答することができるようにというのが、私達の祈りなのです。

私達を暖かく迎えてくださったタイ国の教会に感謝いたします。私達は地の四隅からここに集まることのできた特権を感じます。新しいパートナーシップが醸成されました。新しい友人を作り、さまざまなミニストリーに携わっているお互いを励まし合いました。多くの地で福音への抵抗があります。宗教的、文化的に根強い伝統があるにもかかわらず、私達はこのフォーラムにおいて、キリストの統治に従順であるうとして「新しくされた召命」を受け入れたのです。私達は、全世界がキリストを通して神の救いの恵みを受け入れる機会を持つことができますように、心を尽くします。

これらの誓約は、フォーラムの成果に対する、参加者の応答を表明したものです。また全き教会がフォーラムの成果に刺激を受けて「神の召命」に忠実であろうと決意を強めて行くことを表明するものです。

皆様がイエス・キリストの救いと愛を告げ知らせるために、新しい方法と、「新しくされた召命」を求める時、このケーススタディ及びその実践的な提案と他のローザンヌ特別報告が、皆様と皆様の教会にとって大いに役立つものとされますように願っています。

デイヴィッド・クレイド

目次

私達は福音を恥としません。 5

新しい心 6

新しいビジョン 6

新しくされた召命 7

一章 神のユダヤ人との契約とユダヤ人伝道 8

(a) ユダヤ人イエスと福音を最初に受け取った人々

(b) ホロコースト以降のユダヤ人とクリスチャンの対話

(c) 第二次世界大戦以降のユダヤ人伝道

(d) ユダヤ人伝道を支持する記録

(e) 「ダブル・エメット」・ユダヤ人伝道に反対する

(f) 神が御自身の民と結ばれた契約

(g) 契約についての現代の考え

(h) 真理についての論争

(i) 神学的矛盾

(j) 置換神学の他のかたち

- (k) 「寛容性」のテスト
- (l) ユダヤ人伝道——誰のために？

二章 ユダヤ人社会とユダヤ人伝道 29

- (a) 多様性に富む社会
- (b) 共通性
- (c) 各時代におけるユダヤ人伝道
- (d) ユダヤ人信者とユダヤ人伝道
- (e) ユダヤ人伝道への反対
- (f) 反対派の戦略
- (g) まとめ

三章 教会におけるユダヤ人信者 45

- (a) メシアニック・ジューの思想
- (b) 神学の必要性
- (c) メシアニック・ジューのアイデンティティ
- (d) 文化的アイデンティティの神学
- (e) 真真正正メシアニック・ジューのアイデンティティ
- (f) イスラエルにおけるメシアニックのアイデンティティ

(g) 福音主義とユダヤ人伝道における異邦人

(h) 律法とは何か？

(i) メシアニック・ジューと預言

(j) 神の唯一性とキリストの独自性

(k) メシアニック・ジューの将来

四章 ユダヤ人伝道の際に直面する諸問題 64

(a) 和解に至らない「真理についての論争」

(b) 拒絶の中で「ユダヤ人はイエスを信じない」

(c) 反ユダヤ主義

(d) 現代のマルキオン主義

(e) 終末論

(f) 和解

(g) ユダヤ人伝道とムスリム伝道

五章 ケーススタディーユダヤ人伝道における戦略とイニシアティブ

(a) 地域レベルにおけるユダヤ人伝道

(b) 特殊なユダヤ人グループへの伝道

(c) メディアによる伝道

(d) 訓練と教育

(e) 協力とネットワーク作り・ユダヤ人伝道団体と教会

六章 今日、私達は祈ります・天にまします我らの父よ。

93

付録A ローザンヌ・ユダヤ人伝道協議会(LCJE)

付録B ユダヤ人伝道を支援するLCWEの声明

付録C ユダヤ人の人口

付録D 「ユダヤ人と異邦人の夫婦」への伝道―ケーススタディ

著者たちからのノート